

## 自然的存在としての「身体」について

○ 岡 田 猛 (鹿児島大学)

## 非有機的身体 物質代謝過程 疎外克服の主体形成

## ◎はじめに

スポーツが身体活動をぬきにしては考えられないところから、これまで「身体」論は体育学の基礎的シエマとして論じられてきた。身体活動をその成立根拠の一つとするスポーツ文化の対他文化的特性を論ずる文化論の地平にとっても、人間存在の基礎構造をなす身体の発達へのスポーツの作用を論ずる教育論の地平にとっても、それは不可欠のことであった。そして、それらの論究が人間個人の身体、人間精神を意識した（それとの相関における）身体の問題に収斂していったのもけだし当然であった。

本研究ではそれらのアプローチの究極的意義を認めつつも、もう一段おりたって、自然における身体、換言すれば自然存在としての身体（そのことは身体の歴史的生成の契機をも同時に内包する）について考察するものである。このことは、人間身体の解放（全面発達）をめざすために創造されたスポーツ文化の、今日的、将来的意義を探究するための枠組を考えるために、欠くことのできない基礎的作業であるといえよう。

## ◎非有機的身体としての外的自然

人間は、自己完結的にその存在を維持することはできない。外的自然は人間に対して衣食住の基礎的生活手段をはじめ、労働手段、労働対象の生産手段を提供することによってその生存を可能にする。このように、外的自然は直接的に人間の身体そのものではないが、いわば間接的に人間の身体を構成する「非有機的身体」としての位置をもつ。

内的自然としての人間身体と外的自然とのこのような区別と連関の確認は身体論を展開するうえで必要なことである。

## ◎物質代謝過程からみた身体の位相性

人間の身体が自然力であるかぎり、その身体組織によって外的自然との物質代謝過程が義務づけられてくるが、外的自然との関連において、身体はこれまで近代思想上三つの位相で歴史的にとらえられてきた。第一に、外的自然との交流をほとんど顧慮しない「生命のにない手としての身体」というホッブスの見解であり、第二は、なによりも感性的存在として人間をみ、それによる欲求を外的自然から受動的に充足する「享受主体としての身体」というフォイエルバッハの見解、第三に、感性そのものがすでに「感性的活動」として能動的契機をもっているとし、「実践主体としての身体」とするマルクスの見解である。自然存在でありながら、他の動物と質的に異なる人間の歴史を反省してみる時、もはや前二者の見解をもその内に止揚したマルクスの見解の正しさは明らかであろう。

## ◎労働とその疎外

人間的・内的自然と外的自然の実践的物質代謝をになうのは人間活動としての労働に他ならない。そして、労働によって人間は「自分の外の自然に働きかけてそれを変化させ、そうすることによって同時に自分自身の自然を変化させる」。このように「一客体的にも一主体的にも、直接的に人間の本質に適合するように存在してはいない」自然を人間的に変革する第一次的活動は労働に他ならない。

ところで、一つの歴史的過程としての資本主義社会にあっては、内的自然、外的自然をとともに人間の本質に適合するかたちで変革すべき労働は、労働の生産物が当の労働者以外の他の人間によって横奪されることを起点として疎外される。つまり、労働が疎外される結果、内的自然、外的自然がともに人間の本質に背離したかたちで変化させられるのである。

## ◎労働の疎外された社会におけるスポーツ活動の身体的意義

城塚は、疎外された労働が支配的な社会にあって、その克服のために、人間が自然存在であることを重視し、人間を自然の一部として位置づけ、人間と自然との実践的交流に注目した「新人間主義の哲学」を提唱した。そこで彼は、「自然物と直接に関わること」、「自然物に直接に働きかけること」を内容とする「自然への参加」と、「人間的な組織づくり」を課題として設定した。労働とは異なった非生産的領域での自然との直接的交流、自発的・全人格の関係に支えられた集団の成立は、いずれもスポーツ活動によっても実現が可能であり、スポーツのもつこのような属性は上述の城塚の課題解決にも直接的あるいは側面的に貢献しうると考えられる。スポーツ活動におけるこのような人間における自然・社会の再認識が疎外克服の主体形成にとってもつ意義を軽視することはできない。

つまり、疎外された労働による人間の内的自然としての身体破壊は、スポーツ活動の変革対象として認識されるべきであり、そのことは労働疎外の隠蔽としてよりも、「人間的な組織づくり」にも裏うちされた、人間的な回復の活動体験に基づく変革主体形成の契機として生かされねばならない。労働とは異なって、非生産的領域での人間的な自然と外的自然の物質代謝過程を媒介する活動としてスポーツを規定すると、そこでの主体形成はやがて生産領域における疎外克服の主体形成へとつながる道筋が開けてくるのである。

## 参考文献

- 生活主体としての身体・試論 石井伸男 科学と思想 No.39  
 新人間主義の哲学 城塚 登 日本放送協会出版会  
 人間の弁証法的存在構造 // 東大出版会  
 経済学・哲学草稿 マルクス 城塚・田中訳 岩波書店